

〈書評〉

Karin de Boer

*Kant's Reform of Metaphysics:
The Critique of Pure Reason Reconsidered*
(Cambridge University Press, 2020)

中山 弘太郎

Karin de Boer, *Kant's Reform of Metaphysics: The Critique of Pure Reason Reconsidered*. Cambridge University Press 2020はカント研究における様々な潮流の間の架け橋たろうとする野心的かつ、刺激的な著作である。本書におけるデボーアの主張はその書名に明瞭に表されている。すなわち、前批判期から『純粋理性批判』へ、そしてその先へと続いていくカントの理論哲学の道のりが「形而上学の改革」であったという主張である。この「形而上学の改革」という主張にはふたつの意味が含まれている。第一の意味はカントの理論哲学の歴史的な位置づけに関わる。デボーアはカント以前、および同時代の哲学者の著作と、その主張に対するカントの証言を丹念に追跡することで、『純粋理性批判』を歴史的に孤立したまったく新しい試みとしてではなく、ライプニッツやヴォルフ、バウムガルテンといった伝統的な形而上学を批判的に継承する「改革」として捉える読み筋を提示する。カントの『純粋理性批判』、および続く形而上学の試みはヴォルフから引き継がれた「形而上学の改革」だというのである。第二の意味は『純粋理性批判』の解釈史に関わるものである。デボーアは経験の可能性の条件を説明することそのものを『純粋理性批判』の主たる目的として理解しようとする諸解釈に対してははっきりと反対する。『純粋理性批判』を形而上学へと向けられたプロジェクトとして理解し、その存在論的含意を強調することによって、古くはハイデガーやヴェント、ハイムゼートによって主張され、近年では英語圏のカント研究においてラントンやアライスは新たに提起している『純粋理性批判』の形而上学的解釈を推し進めるのである。こうした解釈方針においても、本書は『純粋理性批判』を「形而上学の改革」として位置づけている。

本書は大きく三つの部分へと区分することができる。まず、第1章から第3章にかけて、デボーアは『純粋理性批判』が誕生する歴史的背景に光を当て、『純粋理性批判』が遂行しようとする「改革」と伝統的な形而上学との連続性を析出する。続く第4章から第7章では、『純粋理性批判』の超越論的分析論における個別的な箇所の詳細なテキスト解釈へと移り、伝統的な形而上学に対するカントの批判を展開することで、超越論的批判の内実を示す。そして、最終章では、超越論的方法論を手掛かりに『純粋理性批判』の先にカントが企図した形而上学の姿を描き出そうとしている。

『純粋理性批判』誕生の歴史的背景から「形而上学の改革」という運動を見定めようとする第1章から第3章は、手始めにヴォルフの試みに焦点を当てる。デボーアによれば、ヴォルフは17世紀の形而上学に対して学的な厳密さを与えようとしたという意味でカントの先行者であり、また、カント自身もヴォルフの方針自体を一定程度評価していたという。こうした観点からすれば、学としての形而上学を樹立しようとするカントの試みはヴォルフによる形而上学の改革運動を先鋭化させたものとして理解することができる。さらに、デボーアは超越論的認識、超越論的哲学、

超越論的批判という三つのタームによってカントの理論哲学を区分し、ヴォルフとの間の連続性と差異を整理する。まず、探究の最も広い区分としては、ヴォルフが自身の存在論において探究したように、カントもまた、「最も一般的な」という意味で超越論的な認識を追求している。この超越論的認識という区分のもとには、実体や因果性といった、最も一般的な諸概念に関する一階の探究としての超越論的哲学、あるいは形而上学が下位区分として属している。改革の先駆者であるヴォルフはこうした一階の探究としての形而上学に対して学的な厳密さをもたらすべく、数学的手法を導入し、体系的な記述を展開した。それに対して、カントは一階の探究に学的な厳密さと体系性をもたらすべきであるというヴォルフの方針自体には共鳴しつつも、ヴォルフ自身の体系には方法論に関する無自覚さという問題があると考えた。ここから、超越論的認識に属するもうひとつの分野であり、形而上学の改革という運動において、カントがもっとも革新的な議論を展開することになる、超越論的批判という領域が見出される。「最も一般的な」認識という主題と、学的な厳密さの追求と方法への注目という観点をヴォルフから引き継ぎながらも、メタ形而上学的な観点を導入することで、改革運動をひとつ上の段階へと押し上げたカントの姿をデボーアは描き出している。

第4章から第7章は形而上学に関する二階の探究として位置づけられる超越論的批判を、『純粋理性批判』における個別の箇所を解釈を通じて解明していく。まず、第4章は本書全体の中でも比較的独立性の高い、物自体概念についての分析である。超越論的な意味での物自体が触発の機能をもつことを否定し、超越論的対象の概念を物理モナド論の可能性へと接続するデボーアの主張は、アライスらによる近年の形而上学的二側面解釈に対するひとつの修正案としても興味深い。続く第5章から第7章にかけては、A版超越論的演繹、図式論、そして「反省概念の多義性」が順に検討される。超越論的批判と形而上学の試みに関するデボーアによる解釈の核心はA版超越論的演繹を論じる第5章にある。超越論的演繹に関する多くの解釈者たちはカテゴリーが経験の可能性の条件であると証示することそのものが演繹の目的であると解釈してきた。しかし、デボーアはこうした方針を明確に拒絶する。経験の可能性の条件の証示は目的ではなく、むしろ形而上学の可能性を保証するための手段だというのである。デボーアは超越論的演繹を経験から出発し、経験の可能性の条件を経由して、純粋概念の使用一般の条件へと遡行するアメリカ的な後退的論証として解釈する。こうした指針のもとで、純粋概念による認識としての形而上学に向けられたふたつの目標が超越論的演繹のうちに見出されることになる。第一の目標は、形而上学そのものの可能性に対するヒューム的な懐疑に対して、経験の領野という制限はあるものの、実体や因果性といった純粋概念が客観的妥当性をもつと示すことにある。そして、第二の目標は純粋概念の適切な使用の根底に純粋構想力による総合が存在すると示すことで、純粋に知性的な認識を追い求めるヴォルフ的な形而上学の試みを打ち砕くことにある。こうしたデボーアの主張の特色は構想力の重視にある。デボーアによれば、空間と時間という感性的直観と、カテゴリーという純粋概念が独立に存在し、図式化によって初めて両者が接合されるわけではない。むしろ、一義的にはすでに図式化されているカテゴリーが演繹によって析出されており、感性的直観との関係を方法論的に捨象した純粋概念の方がむしろ「脱図式化」された派生的概念とみなされるべきだという。デボーアが自覚的に言及しているように、こうした構想力中心主義的な超越論的演繹解釈はハイデガー的である。また、デボーア自身は言及しないものの、純粋直観とカテゴリーが記述の順序においてたんに方法論的に分離されているにすぎないという理解が、近年のピピンや

コナントによる解釈に接近しているという点も興味深い。

最終章である「カントの企図する純粹理性の体系」は、本書の中で最も長く、また最も論争的な部分である。この章において、デボーアは第4章から第7章が詳述した二階の探究としての超越論的批判に対応する、一階の形而上学の体系を素描しようとする。カントは『純粹理性批判』の建築術章において、「批判」の後に続く本来の形而上学の体系のいわば設計図を提示している。デボーアのねらいは『純粹理性批判』が示唆したこの「純粹理性の体系」の内実を、後年のカントによる著作や書簡、講義を手がかりに解明し、カント自身の形而上学の体系とヴォルフやバウムガルテンの形而上学との類縁性に光をあてることにある。建築術章での計画によれば、形而上学の理論的部門である自然の形而上学には大区分として、対象一般にかかわる超越論的哲学と、何らかの直観に与えられる対象としての自然にかかわる合理的自然学が属する。この合理的自然学にはさらに合理的物理学と合理的心理学、そして合理的世界論と合理的神学の四つの部門が属している。カントは四部門からなる理論形而上学の体系を完全には展開しなかった。しかし、デボーアはこうした四部門が時空間という純粹直観についての概念や原則とカテゴリー、あるいはカテゴリー同士を組み合わせることによって、それぞれの主題にかかわる基礎的な概念や原則を導出、展開する学問として構想されていると主張する。この計画のもとで、カントは「純粹理性の体系」の名のもとに、ヴォルフやバウムガルテンが論じてきた基礎的な概念に体系的な整理を与えようとしたというのである。建築術章から出発し、理論形而上学のすべての分野を次々と論じ、後年のカントの立場にまで言及するデボーアの論述はきわめて論争的である。形而上学の一分野としての合理的物理学と『自然科学の形而上学的原理』が完全に一致するのか、特殊形而上学の三部門に含まれる個別の主題を超越論的弁証論に見出すことができるのか、建築術章における体系計画が後年にも維持されているのか。これらはいずれもさらなる検討を要する課題である。したがって、本書の最終章は終点ではなく、始点とみなされるべきである。カントが企図した「純粹理性の体系」という主題は、『純粹理性批判』の歴史的な脈から「形而上学の改革」という運動を追跡した先にデボーアが改めて提示した論争領域であるといえよう。

本書は20世紀ドイツにおけるカントの形而上学的解釈、ラントンを嚆矢とする近年の形而上学的解釈、そして18世紀ドイツ哲学についての歴史研究といった、様々な研究上の潮流を明晰な記述によって架橋しようとする試みである。必ずしもそのすべてが成功しているわけではないが、カント研究が歴史的に充実し、高度に専門化したことによって生じた潮流間の断絶を橋渡しし、つなぎとめようとする試みとして評価に値するだろう。